

(関西・中部地区) 第153回 昼食・講演会

(4月19日 於、ホテルグランヴィア大阪 参加者12名)

講師：高橋 宏(元)サントリー株式会社

演題：巡礼道で会ったヨーロッパ(サンチャゴ・デ・コンポステラへの道)

サンチャゴ巡礼道の起こりは、キリストの十二使徒であるヤコブをコンポステラに祀り八世紀半ばから巡礼道となりました。

私はパリからのメインルートの一部約八百キロを、フランス国境近くのバルカルロスを出発点として西に向かいました。出発して十二キロで巡礼者の多くが出発点とするロンセスバジェスに着きます。その修道院の一角に信任状発行事務所があり、巡礼者たちは信任状によって道中での宿が保証されます。



巡礼道には一日の行程ごとに宿があります。巡礼宿では食事は自炊ができますが多くは近隣のレストランやカフェテリアで済みます。宿舎の運営は教会、地域の役所、ボランティアで行われ、宿泊費は無料ですが協力金として3~5€を納めます。

十一、二世紀には年に百万人ともいわれる巡礼者が押し寄せたと言うことです。同じころ日本でも「蟻の熊野詣で」と言われ巡礼が盛んだったことは興味深いことです。

ロンセスバジェスを五キロ進むと赤い屋根と白い壁を持った家が集まった静かなたたずまいのブルゲータの村があります。ヘミングウェイは、気に入ったこの村で「日はまた昇る」を執筆しました。

この先巡礼道はパンプローナを経てリオハのワイン

で有名なログローニョを通ります。スペイン人のワイン自慢を聞きながらブルゴスに向かいます。ブルゴスはロマネスクの大聖堂と十字軍の英雄エル・シドで有名です。エル・シドの時代でも常にイスラム教徒対キリスト教徒という二極対立の戦争状態ではなかったようです。



巡礼道でピレネー以後の難所のセブレイロに向かう時、愉快的若者フェミニンと同行しました。途上「サンドイッチを食べよう。ワインだ、ビールだ」「宿泊地を変更しよう」などと誘ってきました。

その日の夜、別のグループの一人から注意を受けました。「君が同行していたフェミニンは危険だ。君の金品を狙っている。私は警官なので勘でわかる」と身分証明書を示しながら言う。巡礼道では今まで親切にされてきただけに、新しい経験で緊張の一夜を過ごしました。

サンチャゴ・デ・コンポステラの大聖堂に到着して「栄光の門」に触れ、千年間の指跡の窪みが年齢を感じさせました。

ミサのとき司祭から「日本から巡礼道を歩き終えてくれました」と紹介され参列者の祝福を受け達成感に満たされました。

最後にサンチャゴ・デ・コンポステラからの航空券を購入するとき巡礼終了証を提示すると料金が半額でした。サンチャゴ巡礼に対し教会はもちろん地方政府、ボランティア、企業それぞれの関わりかたに気分の良さが残りました。

(講師；高橋 宏・記)

